慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『デモクラシイ』時代の新人会の活動
Sub Title	The Shinjinkai activity in the Demokurasii (the Democracy) period
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori) 内川, 正夫(Uchikawa, Masao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1981
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.54, No.4 (1981. 4) ,p.1- 26
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19810415-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『デモクラシイ』時代の新人会の活動

中村勝範
内川正夫

一　序
二　思想研究及び啓蒙宣伝活動
三　普通選挙権の要求
四　労働組合運動への着手
五　共鳴者の拡大
六　結　語

一　序

第一次世界大戦はデモクラシーを守るための戦争といわれ、連合国側に参加したわが国においてもデモクラシー運動が高揚した。東京帝国大学新人会（以下新人会とする）はこの運動の一翼を担つて、[1] 大正七（一九一八）年十二月七日に結成され、機関誌『デモクラシイ』（大正八〔一九一九〕年三月創刊、十二月終刊）を発行した。新人会は『デモクラシイ』において多様な思想を模索したが、それらの思想は人間の解放を目ざすという点において共通していた。[2] 新人会が発足した当初、会員が抱

いた思想は素朴な人道主義の発露ともいうべきものであつて、新人会後期のラディカルな思想とは異なるものがあつた。[3]素朴な人道主義の立場から会員は資本主義制度に嫌悪感をもち、人間解放の社会を相互扶助社会の中に見出すという思想を共有していた。この思想を軸に新人会は、資本主義社会の改造をめざし、相互扶助社会を建設するために多岐にわたつて活動した。新人会の本部は、はじめ本郷に設けられ、ついで大正八年四月、東京市外高田村にあつた中国の革命家黄興の旧邸に移転した。[4]そこが『デモクラシイ』時代の新人会の活動の根拠地となつた。本部には、移転直後に麻生久夫妻が引越してきたのをはじめとし、[5]やがて赤松克麿、三輪寿壮、河西太一郎、伊藤武雄、平貞蔵、嘉治隆一、林要、新明正道、山崎一雄等多くの会員が相前後して合宿生活を送つた。[6]寝食をともにする中で会員は相互に人間的な触れ合いを深め、強い絆に結ばれながら、諸々の活動を展開した。

本稿は、新人会草創の時期にあたる大正八年三月の『デモクラシイ』創刊直前から十二月の終刊に到る期間の新人会及び新人会員の活動を考察するものである。

（1）　中村勝範・酒井正文「新人会成立の背景」（『法学研究』第五十一巻第五号　昭和五十三年五月　九一頁）。

（2）　中村勝範・内川正夫「『デモクラシイ』の思想」（『法学研究』第五十二巻第二号　昭和五十四年二月　二八頁）。

（3）　新人会員であつた松沢兼人は「新人会の歴史は、学生運動の前史ではあるが、共産党学生運動と新人会の民主主義（民本主義）とは別のカテゴリーに属するものではないかと私は思つている。その理由は、民本主義が大正期の政治思想として社会進化に大きな貢献があつた点、黎明会の啓蒙運動との関連でわが国の進歩主義の原点になり、新人会もその一部を分担したことに意義があると思うからである。吉野先生の基督教主義が、人道主義と関連を保ちながら、恐らくは暴力否定、武力革命反対の方向に向つてゆくことは当然であつて、新人会後期の学生運動まで、新人会運動に含めて記述することは疑問と思う。スミスの新人会の研究は、創立期の若い帝大学生の精神を十分に尊重していない点に遺憾の点がある。」（松沢兼人「回想新人会記」＜慶應義塾大学法学部政治学科中村勝範研究会編『東京帝大新人会研究ノート』昭和五十四年十一月　一〇頁＞）と述べている。

（4）　『デモクラシイ』の移転広告によれば、本部は東京市外高田村三六〇〇番地にあつた（『デモクラシイ』第三号　大正八年五月　二〇頁）。

（5）　「新人会記事」（『デモクラシイ』第四号　大正八年六月　一六頁）。

（6）　林要『おのれ・あの人・この人』（法政大学出版局　一九七〇年六月）一〇六頁。

二　思想研究及び啓蒙宣伝活動

新人会は最初、社会思想の研究団体を目ざして創立されたが、活動が開始されると、研究会がおこなわれる東京帝国大学第二学生控所は、冷静に落ちついて理論の研究に耽るというよりも、実行意識に燃えた熱情的な空気に溢れ、革命志士の集りといつた雰囲気であつた。[1] 研究会の雰囲気は行動的なものに憧憬するところがあつたが、『デモクラシイ』には冷静な研究成果が多く掲載された。『デモクラシイ』に登場した思想は、後継三誌、すなわち『先駆』、『同胞』、『ナロオド』の時代とは異なり、特定の思想に傾斜することなく、[2] デモクラシー、マルキシズム、ボルシェヴィズム、社会民主主義、サンジカリズム、I・W・Wの思想、ギルド・ソーシャリズム、アナーキズム、フェビアン協会イズム、国家社会主義等とあたかも北国の春に花々が一時に咲きでた形であつた。[3] 大正デモクラシー期の学生はこれら百花繚乱たる新イデオロギーを旧勢力に先んじて輸入し、宣伝することを、闘争と意識していた。[4] 新人会も機関誌の発行による思想宣伝が新人会の主たる事業であるとした。[5] 機関誌発行以外の新人会の活動は、講演会・演説会の開催、他大学の学生との提携、労働組合運動にコミットメントすること、支部を建設することなどであつた。[6] 以上の活動は思想宣伝を明確に打ち出したものもあれば、活動を通じて副次的に思想宣伝の効果を期待し得るものもあつた。したがつて、すべての活動を画一的に論ずることは不可能であるため、本節においては思想の宣伝を明確にした機関誌の発行、講演会・演説会の開催などの啓蒙宣伝活動について概観する。

新人会が『デモクラシイ』を発行した目的は、そこに自からの思想を表明し、宣伝するためであつた。新人会は、新人の一群が意気と信仰とをもつて『デモクラシイ』を創刊した、[7] というが、この場合の信仰とは新人会員の多くがキリスト教に触れていた[8] というところからくるキリスト教信仰という限定されたものではなく、新時代はかくならざるべからずという確信ともいうべきものである。かれらはそれをネオ・ヒューマニズムと呼んだ。[9] それがヒューマニズムではなく、ネオ・ヒュー

マニズムでなくてはならぬ理由は、従来からのヒューマニズムは堕落した現世と妥協するところがあると考えたからである。ネオ・ヒューマニズムはその妥協を拒否し、人類相互の関係を強力にし、人類の精神を卑劣ならしめている現在の生活組織を改造しようとするものであつた。それは人道的であると共に社会改革的であるという両面を有するものであつた。新人会員は、このネオ・ヒューマニズムをかれらの宗教とし、かれらの活動の拠点を教会[10]にたとえ、かれらの宗教をひろめる布教のための一手段として『デモクラシイ』を刊行した。学内外において、新人会が催した講演会・演説会も、ネオ・ヒューマニズムを啓蒙宣伝するためのものであつた。これらの催物は、『デモクラシイ』創刊前から実施していたが、これらのものが開催されるごとに新人会は新入会者を迎え、会勢を伸長させることができた。『デモクラシイ』期は大正八（一九一九）年の約一年間であるが、この期間を通じておこなわれた講演会・演説会は以下のごとくであつた。

一月三十日。講演会。午後三時より帝大法科三十二番教室において大山郁夫が「新人の意識」と題する講演を行つた。星島二郎、麻生久も講演したが、テーマは不明である。聴衆約四百名であり、終了後晩餐会が開かれ、四、五十名の出席があつた[11]。この講演会は大成功であつた。赤松克麿によれば、この集会は涙ぐましいまでに感激的気分の漲つたものであり、特に晩餐会の席上麻生久が語つた青年知識階級の任務という話は、熱情的な雄弁で参会者に感動を与えたという。集会後、興奮した面持ちで新人会入会を申出た学生の中に、波多野鼎、平貞蔵らがあり、ついで新明正道、早坂二郎、松沢兼人、山崎一雄、門田武雄らが入会した。以後、集会が催される毎に何名かの入会者があらわれたが、赤松は宗教的伝道の後に信者が出て来るような趣であつたとしている[12]。

二月二十日。討論会。午後六時より第二学生控所において徴兵問題討論会を開催した。松波仁一郎博士が「徴兵制度撤廃論」を講演した。終了後、同問題及び外交問題に就いて自由討論を行つたが、来会者は十名であつた[13]。

二月二十七日。講演会。午後三時より三十二番教室において有島武郎が「自分の芸術に就いて」と題する講演を行つた。

聴衆は約五百名であり、晩餐会には亀戸分会の労働者も出席したが、彼等の真摯な主張が会衆を感動せしめた。[14]

四月十九日。演説会。京都新人会の発会に際して、京都市会議事堂において開催された。西下した新人会員は、赤松克麿、宮崎龍介、平貞蔵、高島志容、波多野鼎、門田武雄、村上堯の七人であつた。演説会には四人が登壇し、京都側の三人とともに、演説した。演壇では熱烈に真摯にかつ赤裸々に新人の主張が宣伝された。雨を冒して参集した会衆の胸には時代精神に対する共鳴がリズムをなして伝わつた。[15]

四月二十日。演説会。名古屋新聞社の厚意により商業会議所の階上で開催された。会衆は百余名であつた。西下した七人が総出で演説した。新人会は、演説のすべてが徹頭徹尾新人会気分を以て貫かれ、会員の純真かつ徹底した叫びはかならずや聴衆の心に槍の様に鋭く食い入つたに相違ない、[16]との感想を持つた。

九月二十六日。演説会。大学構内において開催された。演説者は、麻生久、赤松克麿、新明正道、河西太一郎ら新人会員のみであつた。演題及び聴衆の数など不明だが、演説会は成功し、晩餐懇談会も盛況であつたと記された。懇談会へは各方面からの出席があり、新人会に対する支持者が増えつつあることを感じさせるものであつた。出席者の中には北京大学の学生と交歓して帰朝したばかりの岡上守道、先輩格の山名義鶴らがおり、新人会員以外では早稲田大学の民人同盟会、法政大学の扶信会、その他の大学、高師、高商の学生、さらに朝鮮、支那の留学生も来会した。[17]

十一月三十日。創立一周年記念祭。高田村の合宿所において開催された。記念式、余興、模擬店、卓上演説が行われた。午後から夜にかけてすつかりユートピアの気分が汪溢し期待以上に盛会であつた。[18]記念祭には各方面の人々が来会し、家族同伴のものもあつた。進歩的とみなされる人々を傾向やゆきがかりにこだわらず新人会は招待した。招待された者の中には思想的にみても、アナーキストもおればボルシェビキもいたが、林要はかような在り方を、なんの係累もない純情一路の新人会にふさわしいものであつたという。[19]林は、当日は雪もよいの空のどんよりくもつた寒い日であつたが、意外の盛況で学者

も主義者もインテリの元老も実践運動の猛者もぞくぞくあつまつた、そうした多方面の勇将たちが一堂にあつまつて和気あいあいのうちに談笑をともにするというようなことは、あるいは初めて終りだつたかもしれない、と回想した。

十二月二日。新人会創立一周年記念演説会。夜、神田一橋通りの帝国教育会において開催された。出演者は、河西太一郎、新明正道、平貞蔵、門田武雄、宮崎龍介、赤松克麿であつた。[20] 演説のテーマも聴衆の数も不明であり、この演説会が成功であつたかどうかの記録もない。数日後に同じく帝国教育会で開催された第一回学術講演会に比し、記念演説会の記録は記念と銘打つた割には不完全である。

十二月七、八、九日。第一回新人会学術講演会。三日間にわたり夜六時から十時まで神田一橋通りの帝国教育会で催した。新人会はこの企画に精力を注ぎ、講演会には、権威がありしかも新しい理想精神と改革意志をもつ人々を講師に招き、長時間かつ内容のある講演をしてもらう、と予告した。[21] 講師及びテーマは、大山郁夫「破壊の原理と改造の原理」、吉野作造「改造の原理」、森戸辰男「生存権と労働の芸術化」、櫛田民蔵「資本経済の本質と社会改造の方向」であつた。学術講演会終了後、同講演会は講師と聴衆と相俟つて非常な成功を収めた、と報ぜられ、予告の際にもなされていた学術講演会の年二回開催が約された。[22] 新人会は、学術講演会は真に民衆大学の濫觴であつた、と自己評価し、後にこの時の講演が講演集として刊行された。[23] 新人会が『デモクラシイ』時代に開催した講演会は学内において二回、学外において一回の計三回、討論会は学内において一回、演説会は学内において一回、学外において三回の計四回であつた。

行事の相談をしたり、親睦のためだつたりしたが、新人会は例会をもつた。この例会についてはごく簡単な記録しか残されていない。

三月二十八日、第二学生控所で開かれ、春休み中の仕事や『デモクラシイ』第二号の発送のことなどに就いて話し合つた。[24]

四月十五日、同じく第二学生控所で関西行の下相談をした。[25]

五月三日、学年最終の例会を第二学生控所で開いた。[26]
六月十七日、高田村の本部で開かれ、二十名が参加し、会の方針について協議した。[27]
九月十日、本部で。十八日、大学で開かれ、両日とも大挙宣伝について協議した。[28]

『デモクラシイ』が掲げた例会報告はこのように極く簡単なものではあつたが、思想宣伝のために研鑽する新人会員の姿を垣間見ることは出来る。

思想宣伝と新人会一周年記念事業の一環として新人会叢書の出版計画をもつた。叢書の刊行は『デモクラシイ』時代においては実現されず、重厚な研究・翻訳書を出版したいという意欲を表明した。[29] これが実現を見たのは『先駆』の時代であつた。

『デモクラシイ』時代の新人会員は思想宣伝に臨み、機関誌上で健筆を振い、新人会主催の演説会で所信を表明するなどの活動を行つたが、新人会以外の場所においても宣伝に従事した。たとえば、『解放』誌上にはかなりの新人会員が寄稿し、かれらの抱懐する思想を表明した。[30]『解放』は麻生久により大正八年六月に創刊され、同年七月には赤松克麿が法学部を卒業すると同時に主幹となつた。[31] やがて、『解放』は新人会同人で編集部が組織され、宮崎龍介が編集主任となり、山崎一雄、赤松克麿、新明正道がこれを助けた。[32] 当時、政治評論を中心とした雑誌は『中央公論』が著名であつたが、新人会員は同誌の論調にもの足りなさを感じていたこともあり、『解放』誌上に自分たちの革新的所論を数多く掲げようと試みた。新人会員は、時代の要求に解答を与え、巷に充満する民衆の不満に点火し得る激しい評論雑誌を作ろう、との意気込みを堅く持していた。[33]『解放』誌上における新人会の主張も、かれらの機関誌においてなされたように資本主義制度を糾弾するものであつた。一例を紹介しよう。波多野鼎は、資本主義唯物主義の社会はかれらが理想とする社会とあまりにもへだたり、すべてが打算的である、今日の社会には人間らしい美わしい関係がみられず、人類の社会ではなく獣類の社会である、とまで断言した。[34]『デモクラシイ』発刊期にあたる大正八年中に『解放』に筆を振つたものは、麻生久、波多野鼎、佐々弘雄、赤松克

麿、宮崎龍介、村上堯、佐野学、岡上守道、新明正道、山崎一雄の十名であつた。新人会員は『解放』には多数登場したが、会員はいまだ一般的には知名度も低く、『解放』以外の総合雑誌では『我等』に蠟山政道が寄稿した程度であつた。[35]

新人会員は、新人会主催以外の演説会においても啓蒙宣伝を行つた。十月二十五日、青年文化同盟の創立演説会において門田武雄が「開会の辞」を述べ、河西太一郎が「何処に行く」、新明正道が「理想と現実の間」と題する演説を行つた。[36] 大正デモクラシーの風潮が高まりをみせる中で、東大の学生以外にも、社会変革の活動をめざす学生が出現した。この大同団結体が青年文化同盟であり、人類同胞の社会を建設しようという目標を掲げて、大正八年十月十日に創立された。大会宣言には、青年文化同盟は人類生活の現状に戦慄し、已み難き革新的熱情に駆られて奮起したる青年学徒の団結である、とあつた。創立大会には、新人会、法政大学の扶信会、早稲田大学の民人同盟会、建設者同盟、一新会が参加した。同盟の本部は高田村の新人会本部に置かれることになつた。青年文化同盟の結成に際して新人会が大きな役割を果したことが伺われる。新人会はまた、労働者との連帯の中でも啓蒙宣伝に従事できた。大正八年九月十六日、新人セルロイド工組合日暮里支部は演説会を開催した。この演説会には、赤松克麿、新明正道、門田武雄が出演したが、[37] これが大正八年秋における新人会の啓蒙宣伝第一声であつた。

(1) 赤松克麿「新人会の歴史的足跡—創立十年にして倒れた彼の社会運動史的業績—」（『改造』第十巻第六号　昭和三年六月　六九頁）。
(2) 前掲中村・内川『『デモクラシイ』の思想』
(3) 林要「新人会のころ」（『歴史をつくる学生たち』東大協同組合出版部　昭和二十二年）一七三頁。
(4) 建設者同盟史刊行委員会『早稲田大学建設者同盟の歴史　大正期のヴ・ナロード運動』（日本社会党中央本部機関紙局　一九七九年九月）二三頁。
(5) 「編輯便り」（『デモクラシイ』第八号　大正八年十二月　三六頁）。
(6) 前掲林要『おのれ・あの人・この人』一〇七頁。
(7) 「編輯便り」（『デモクラシイ』第二号　大正八年四月　二〇頁及び『デモクラシイ』第三号　大正八年五月　二〇頁）。
(8) 前掲中村・酒井「新人会成立の背景」一〇八頁。
(9) 「ネオ・ヒューマニズム」（『デモクラシイ』第一号　大正八年三月　一頁）。

(10) 新人会は最初本郷臺町に本部を設けたが、赤松克麿は、この本部をさして自分達の教会である、と形容した（「臺町私語」〈『デモクラシイ』第二号 大正八年四月〉 一五頁）。本部を教会とたとえることにもキリスト教の影響がみられる。

(11) 「新人会記事」（『デモクラシイ』第二号 大正八年四月 一六頁）。

(12) 前掲赤松克麿「新人会の歴史的足跡」 七〇頁。

(13) 「新人会記事」（『デモクラシイ』第二号 大正八年四月 一六頁）。

(14) 右同。

(15) 「中京と西京」（『デモクラシイ』第四号 大正八年六月 一六頁）。

(16) 右同。『名古屋新聞』（大正八年四月十九日）の「新人会講演会」予告には赤松、宮崎、高島、門田、平、波多野が演説するとされているが、同紙（四月二十一日）の「新思想喧伝 新人会の獅子吼」では村上、高島、門田、平、宮崎、赤松が演説したとされ、その内容要約が記載されている。

(17) 「新人会記事」（『デモクラシイ』第七号 大正八年十月 一六頁）。

(18) 「新人会記事」（『先駆』第一号 大正九年三月）。

(19) 前掲林要『おのれ・あの人・この人』 一一三頁。

(20) 「新人会記事」（『先駆』第一号 大正九年二月）。

(21) 「編輯便り」（『デモクラシイ』第八号 大正八年十二月 三六頁）。

(22) 「新人会記事」（『先駆』第一号 大正九年二月）。

(23) 第一回学術講演集の出版は『先駆』時代になされたが、『先駆』は講演集について数回にわたり紹介文を掲げた。たとえば、「新人会第一回学術講演集は、近く大鐙閣から出版される運びになつているが、其内の『生存権と労働の芸術化』は、『クロポトキン社会思想の研究』と言う論文の為めに朝憲紊乱と認められ思想界の大問題となつた森戸氏の中心的思想の本流が那辺にあるかを知るに恰好のものである。」（「新人会記事」〈『先駆』第二号 大正九年三月〉）というものがあつた。講演集は大鐙閣より出版される予定であつたが、実際には聚英閣から出版されることになつた（「新人会記事」〈『先駆』第四号 大正九年五月〉）。聚英閣から出版された第一回新人会学術講演集は『民衆文化の基調』という書名であつた。四六版、二百四十頁、定価壱円参拾銭であつた。新人会叢書の一冊であるブルードン著・新明正道訳『財産とは何ぞや』（大正十年四月発行）に掲載されている一頁大の広告『民衆文化の基調』の内容紹介は左の通りである。森戸辰男のもの以外は題名が多少変更されている。

資本家社会に於ける矛盾の発展　櫛田民蔵

今日の資本主義経済及機械文明を解剖し、その製産方法に基く必然的陥穽を指摘し、私有財産廃止説に至る研究の発表――

民衆文化の原理　大山郁夫

来在のブルジョア文化の殿堂を検討し、新たなる民衆の芸術、哲学、宗教、法律を基調とし人間性に基く新文化の健設（けんせつ）を提唱す。

生存権と労働の芸術化　森戸辰男
経済生活に於ける分配論より「人間としての権利」に基く生存権説と合理的社会に於ける生活の芸術化を説く全八十六頁に亘る長論――
改造とは何ぞ　吉野作造
目下の世界に横溢せる改造運動の理想を研究批判し、唯物的制度改革万能論を排斥して理想主義的改造の原理を説ける大論述なり。

(24)(25)(26)　「新人会記事」（『デモクラシイ』第四号　大正八年六月　一六頁）。

(27)　「新人会記事」（『デモクラシイ』第五号　大正八年七月　一一頁）。

(28)　「新人会記事」（『デモクラシイ』第七号　大正八年十月　一六頁）。

(29)　「我等の同志によつて『新人会叢書』が発行されることになりました。第一編としては岡上守道君の『国家論』（オツペンハイマア著）の飜訳がでます。オツペンハイマアの名は未だ我等の耳に馴れていませんが識者の間には大層珍重されていたものであつて彼独特の深刻な社会的な国家観は確かに国家の本質に就いて考へ悩んでいる若い方々によつて歓迎さるべきものたることを確信します。第二編以下『カントかマルクスか』『現代猶太人の研究』『ロシア社会学』等の研究や飜訳が陸続印刷になる筈で、成る丈け永遠的価値のあるドツシリしたものを出してゆきたいという希望です。これは新人会一週年紀念事業の一つですが。」（「新人会記事」（『デモクラシイ』第八号　大正八年十二月　三六頁）。ここに予告された新人会叢書は全く予告とは異なつた形で後日出現した。大正十（一九二一）年三月に新人会第二回学術講演集『新社会への諸思想』に附されている広告によれば新人会叢書は次の順に聚英閣より刊行された。

第一編　ヘッカア著・波多野鼎訳　ロシア社会学
第二編　ベルンシュタイン著・法学士嘉治隆一訳　修正派社会主義論
第三編　プルードン著・法学士新明正道訳　財産とは何ぞや
第四編　エルッバッヘル著　法学士若山健二訳　無政府主義論

われわれは右の新人会叢書をすべて所有している。それぞれの刊行年月日をしるすと第一編は大正九年十月五日、第二編は大正九年十月二十日、第三編は大正十年四月二十日、第四編は大正十年五月二十日である。なお新人会叢書として出版を予告されたフランツ・オッペンハイマー著・法学士岡上守道訳述『国家論』は大鐙閣より大正九年五月二十八日に発行されたが、この書の冒頭に置かれた「訳者序」の最末尾には「新人会一週年の記念日を祝いし翌夜　岡上生」とある。

(30)　『解放』に寄稿した新人会員と論題は、第一巻第一号（大正八年六月）に、麻生久「人類解放の諸精神」、波多野鼎「現実の社会と吾等青年」、同第二号（同七月）に、佐々弘雄「解放の先駆者」、赤松克麿「祖国礼拝党の重鎮上杉博士」、宮崎龍介「時代と上杉先生」、村上堯「上杉先生の印象」、同第三号（同八月）に佐野学「労働者運動の指導倫理」、岡上守道「露国革命の先駆者としての猶太人」、新明正道「軍国主義の虚偽」、麻生久「世界労働運動の方向」、同第五号（同十月）に、山崎一雄「穂積重遠博士」、同第六号（同十一月）に、麻生久「国際労働会議に対する政府の態度と友愛会」、山崎一

雄「英国労働運動の趨勢と三角同盟」、黒田礼二「バガボンドの北京見聞記」（黒田礼二は岡上守道のペンネームである）、同第七号（同十二月）に、宮崎龍介「新装の民国から」、であつた。

(31) 大正八年七月には赤松克麿、石渡春雄、河村又介が法学部を卒業した。赤松が『解放』の主幹になつた外、石渡は大阪の自由法律相談所において無産階級擁護の弁護士として活動することになり、河村は東京帝国大学の政治学研究室助手として奮闘することになつた（「新人会記事」・〈『デモクラシイ』第六号　大正八年九月　一六頁〉）。

(32) 「新人会記事」（『先駆』第一号　大正九年二月）。しかし、新人会は大正九年三月十一日限り『解放』との関係をたつ。『先駆』は、それを「同時に元同人であつて其主筆をしていた宮崎龍介君は新人会から除名することゝした。従来矢張り編輯を助けていた赤松山崎新明も連袂辞職をしたから、今後宮崎君がなほ同誌の編輯を続けても、本会とは全く関係のないことを承知しておいて頂きたい。」（「新人会記事」〈『先駆』第三号　大正九年四月〉）と報じた。

(33) 宮崎龍介「柳原白蓮との半世紀」（『文芸春秋』第四十五巻第六号　昭和四十二年六月　二二二頁）。

(34) 波多野鼎『現実の社会と吾等青年』（『解放』第一巻第一号　大正八年六月　八八―九〇頁）。

(35) 蠟山政道「新らしく得た一つの歓び」（『我等』第一巻第二号　大正八年三月）。その後、『我等』には新人会員が多数執筆するが、その全執筆目録は前掲中村勝範研究会『東京帝大新人会研究ノート』に調査発表されている。

(36) 山崎一雄「青年文化同盟の歴史」（『デモクラシイ』第八号　大正八年十二月　二九頁）。

(37) 「新人会記事」（『デモクラシイ』第七号　大正八年十月　一六頁）。

三　普通選挙権の要求

新人会を結成する際に主役となつた赤松克麿、宮崎龍介、石渡春雄は、普通選挙権要求の声が高まる中で吉野作造の下に結成された普選研究会の発起者でもあつた。普選研究会の参加者のうち、やがて新人会の重要な人物となつた者としては、赤松、宮崎、石渡の他、河村又介、林要、河西太一郎、三輪寿壮、波多野鼎、細野三千雄、平貞蔵、佐々弘雄、石浜知行、千葉雄次郎、新明正道、門田武雄、早坂二郎、山崎一雄、松沢兼人、河野密、住谷悦治、小岩井浄、風早八十二、阪本勝らがいた。吉野は集つた学生に対して普通選挙制度の総合的研究を題目として各自に項目を分担させ広汎な調査を実施しよう

としたが、吉野対浪人会立会演説会事件のため、研究なかばにして赤松らは同研究会を脱し、新人会結成に走つた。[1]

新人会の結成は当時の雰囲気の中においては、普通選挙制度の研究から普選獲得の実践運動へ発展したものとしてマスコミから注目された。[2]新人会員の談話として新聞にとり上げられたところによれば、新人会は普選要求の第一着手として大学生の一大示威運動を行い、公開演説会を開催するとした。[3]そのために新人会は早稲田、慶應を初めとする私立五大学生とも連絡を取り、多数の同志を得たとも報じられた。[4]新人会のかような活動には社会的な背景があつた。普選運動は、大正八年に入り俄に組織的となり、普通選挙同盟会を初め、青年団体、政党の運動も活発化していた。その気運に動かされて、早稲田大学には普通選挙促進同盟会、日本大学には学生同盟会などの学生団体が生まれていた。[5]それに新人会その他の学生有志を加えて、都下の学生運動は普選要求に向かい胎動しだした。これらの学生の団体では、まず新人会が二月十一日の紀元節を下して都下の各大学生を糾合し、一大示威運動を決行する旨決議した。普選デモの会場は日比谷公園音楽堂前の運動場であつた。午前十時半開会予定のところ、デモ参加の学生は午前九時頃から雪解けの泥路を押し寄せた。[6]盛況であつた。夜は神田青年会館において演説会が開催された。満場立錐の余地なく、下駄ばき、足駄ばきのまま折重つて階段に溢れ、廊下に溢れ、ガラス窓に溢れた。九時散会後も会衆は興奮のあまり、しばらくベンチから立たなかつた。[7]新人会は示威運動を呼びかけ、演説会に参加し、さらに普選提出者賛成署名を求め代議士の間を戸別訪問して回つた。普選運動の先頭に立つ大学生に文部省は不穏当であるという態度を示し、とくに東大生については原敬首相が中橋徳五郎文部大臣に指示して、大学当局に学生の運動参加を禁ずべきことを申しわたした。[8]普選運動に情熱をそそいできた新人会の運動がここで壁にぶつかつたことを記憶しておきたい。

新人会が普通選挙を要望した思想的根拠は、いかに稼いでも貧乏を振り捨てることができないのは、民衆が政治に参与する権利を有していないからである、専制官僚の本元であるドイツでさえも普選を行つており、今日、普選の行われていな

い国はトルコと支那と日本のみである、日本にあつて間接税を納めない者は一人もいないのであるから納税資格によつて選挙権を拒まれる理由がないという主張であつた。[9] 非会員ではあるが、森荘三郎の、日本が文明国であり国民の忠誠を信ずるならばすみやかに普選を実現し、真正なる国民の意思を発表させるよう努力せよ、との主張[10]が新人会機関誌に発表されたのは、森の意見が新人会の見解と同じであつたからであろう。また、赤松克麿も、普選要求の声が今や天下の世論となつた、と書いた[11]が、赤松は、普選実施気運の高まりを認めつつも、普選実施自体は人類解放の第一門たるに過ぎない、とした。この点、赤松は普選実施唯一論ではない。赤松は、普選実施という関門は是非とも通過すべきものであるが、この後にも解放運動の終局の勝利までにはまだ幾多の難関が横たわつていることを警告していた。新人会はやがて普選運動から離脱していくが、赤松は、それより早く、普選要求が高まつた時点において、すでに、普選運動唯一論をとらなかつた。新人会は、他の普選運動者と同様に、普選運動は所詮資本主義社会との妥協を図るものであり、社会改造のための唯一策ではない、と判断するようになる。『デモクラシイ』も普選関係の論稿はすべて第一号に掲載され、第二号以下にはまつたく姿を消す。新人会は、二月十一日の示威運動以後、急速に普選運動から離れていく。学生デモが解散した時、帰途についた宮崎龍介は、後から追つてきて普選組織に入会を希望する青年と一緒になつた。青年とは渡辺政之輔であつたが、宮崎は渡辺に普選運動よりも労働組合運動の方が必要であると説いた。[12] この逸話にも象徴されるように、新人会は、普選運動は資本主義制度の枠内での改良運動に過ぎないだけではなく、その効果は労働組合運動より低いと考えるようになつた。約一年後には、普選離れの論調はさらに明確となり、普選が目標ではなく、普選を手段としてなさるべき社会の改造が目的である、普選を要求する場合にも、常に目的が社会組織の改造にあることを忘れないようにしなくてはならない、[13] とまで述べるようになつた。社会改造のための普選要求ということであり、普選そのものの価値は低下していくようになる。

(1) 前掲中村・酒井「新人会成立の背景」九三―四頁。

（2）「米大統領ウイルソン氏の高唱した人類解放の新運動は今や世界的の大思潮となつて我国に於ても之に協調して新機運を促進する各種の運動が開始されて来たが普通選挙要望の如き其最も著るしき事例である。東京帝大学生間に於ても此の新機運を促進する目的を以て今回法科大学生が中心となつて新人会と云うのを組織し三十一日に其の発会式を三十二番教室で挙行した。」（『東京朝日新聞』大正八年二月二日）。

（3）（4）右同。

（5）菊川忠雄『学生社会運動史』（海口書店　昭和二十二年六月）　五七頁。

（6）当日の状況はつぎのようなものであつた。「丁年以上の男子に選挙権を与えよ」の声に共鳴した学生は、午前九時頃から雪解けの泥路をことともせず、ヒシヒシと押寄せた。白と赤の布片を角帽に結え付けた各学校の委員たちはせわしげに走りまわつた。デモは学生三十名を一隊とし各隊に委員をつけ赤旗を先頭に公園を斜めに西幸門から衆議院に向つた。同院では岡部次郎、三木武吉、小泉又次郎、川崎克、鈴木富士弥、横山勝太郎、樋口秀雄の各代議士が燕尾服で迎えた（『東京朝日新聞』大正八年二月十二日）。

（7）当夜の状況はつぎのようなものであつた。神田青年会館は満場立錐の余地なく、下駄ばき、足駄ばきのまま折重つて階段に溢れ、廊下に溢れ、ガラス窓に溢れた。六時の定刻を待兼ねて、会衆が熱烈な声で演説をはじめるなど、会場には熱気があふれ、かような雰囲気の中で、石田三治が普通選挙期成同盟会を代表して開会の辞を述べた。ついで尾崎行雄、関和知、今井嘉幸が登壇し、与謝野晶子の婦人参政権論の代読もなされた（右同）。今井嘉幸は、「仮りに此会衆を二千人とし、其一人が一日に一人ずつ宣伝すれば、僅に半月にして日本全国民を普通選挙論者とすることが出来る」（神戸学術叢書5『今井嘉幸自叙伝　五十年の夢』神戸学術出版　一九七七年六月　一九八頁）と獅子吼した。

（8）松尾尊允「第一次大戦後の普選運動――一九一八―一九二〇年――」（井上清編『大正期の政治と社会』岩波書店　一九六九年三月　一七二頁所収）。

（9）「普通選挙要望の檄」（『デモクラシイ』第一号　大正八年三月　一三頁）。

（10）森荘三郎「瑞西の国民投票」（『デモクラシイ』第一号　大正八年三月　五頁）。

（11）植田四郎「参政権の原理」（『デモクラシイ』第一号　大正八年三月　七頁）。なお、植田四郎は赤松克麿のペン・ネームである。

（12）前掲菊川『学生社会運動史』　五九―六〇頁。

（13）山崎一雄「普通選挙と新興文化」（『先駆』第一号　大正九年二月　八頁）。

四　労働組合運動への着手

普選デモに参加し渡辺政之輔と邂逅した宮崎は、当時を回顧して、その頃新人会が学生の思想運動と労働組合運動をいかにして結合させるべきかについて議論していた、と記している。(1) 新人会員は、社会主義という言葉がもつムードに酔うのみ

であつたり、革新的な思想について議論するのみであつたりすることに満たされないものを感じていた。新人会の集会に渡辺やその同僚という職工たちが出席し、学生たちと議論をしたが、かような労働者との接触の中で、新人会員は会が単なる学生の思想研究団体にとどまるならば、改造運動の発展を期することはできないという結論に達した。言葉の遊戯に耽けるのでなく、大いなる飛躍を図るためにはいかにしても労働運動との結合が不可欠だとし、労働運動に着手することになつた。これらの議論がたどりついた結論が、渡辺政之輔の勤める永峰セルロイド工場を中心とした新人会亀戸分会の結成である。それは大正八年二月二十四日であつた。[2] 亀戸分会はやがて労働組合結成の方向に進み、五月六日には全国セルロイド職工組合の発会式が挙げられた。[3] この組合は別名新人セルロイド工組合ともいわれた。労働者との接触が進行する過程において、いかなる形態をもつて労働運動に着手すべきかにつき、新人会は討論を続けた。結論として、まず同盟罷業を敢行しようということになつた。[4] 最初の罷業は、新人セルロイド職工組合が成立した直後の六月二日に発生し、永峰セルロイド商会は職工側より要求された賃金の三割値上を承認した。[5] ついで、七月二十九日に永峰セルロイド会社の職工三百三十余名が同盟的怠業を初め、三十日には交渉委員を選んで会社側と折衝を重ね、三十日以降問題解決迄不就業を決めた。職工側は動静視察委員、伝令、巡視係、演説係等部署を定めて活動を開始した。八月一日、会社側は平均三割の賃上、臨時手当二倍半増額を発表し、争議は労働者の勝利となつた。[6] この争議の間、新人会本部はまさに上を下への興奮で、会員は亀戸の一角のストライキに連日連夜決死の覚悟をもつて押しかけたという。最初に着手した労働組合運動にしては、叙上のごとく予期以上の首尾となつたことが、新人会の実際運動傾斜をさらに高めることとなつた。

新人会としての労働運動への着手は新人セルロイド工組合の結成と争議活動であつたが、会員はすでに会結成以前より労働問題に接近していた。たとえば、高野岩三郎の斡旋で月島に労働者生活相談所ができ、月島を山名義鶴、麻生久、佐野学、岸井寿郎、蠟山政道、棚橋小虎、赤松克麿、細迫兼光、野坂参三、平貞蔵、新明正道、三輪寿壮らが訪ずれ、山本懸蔵らの

労働者との接触をもつた。[7] 林要は月島や亀戸での労働者との触れ合いをつぎのように回想した。[8] すなわち工場街まで出かけていく「最高学府の大学生」に労働者たちは好意の耳をかたむけ、また新人会員も汗くさいナッパ服の労働者の経験談や雑談に好奇の耳をかたむけた、聞くことはみな耳あたらしく、かような善意の投合だけが、未熟と幼稚さを前進的エネルギーに転化した、という。新人会は以上のように、労働者との係わり合いを深めていき、かれらの機関誌はその経過を誇らかに記録した。労働者の中へ入つていく大学生、これぞわれら新人という意識がそこにあつた。

大正八年六月、麻生久は東京日日新聞社を辞し友愛会へ入会した。[9] 友愛会にはすでに野坂参三、棚橋小虎がおり、麻生を加えて三人が友愛会に属することになつた。野坂が七月七日神戸港を出帆して英国に赴いた後は、[10] 麻生と棚橋が新人会員として友愛会内において注目を浴びることとなつた。[11] 麻生は、友愛会入りに際して、自分が友愛会に入会することにより、新人会員を大量に友愛会に入会させ得る、と考えた、[12] 友愛会入りした麻生は、新人会員に手伝える者は手伝え、と呼びかけてきた。[13] 新人会員は友愛会の労働学校を手伝うほか、麻生が平沢計七にかわつて発行及編集人印刷人となつた友愛会の機関誌『労働及産業』に寄稿するなどの協力を行うことになつた。[14] 麻生は友愛会に新人会員を入会させるためにも、友愛会を新人会が理想とする労働団体に改組すべきだと考えた。つまり、従来の労資協調的な姿勢から資本主義制度と妥協しない労働組合に友愛会を変えることであつた。麻生は目標とする労働運動はロシアにおけるが如きものだと考えていた。麻生はロシアの労働運動は単に、ロシアの労働者のためのみならず、現在の人類を圧迫している専制的権力者の横暴、資本家の貪婪、国家と国家との盲目的なる戦争、国民と国民、人種と人種との無意味なる反目をこの世から一掃し人類の世界を真に平等自由相互扶助の精神に充ちた世界になさんと欲するものだ、とした。[15] 麻生のめざすところは、ロシアの労働運動のめざすところと同じであるとされた。麻生、棚橋の意図を反映し友愛会が変質することになつたのは、[16] 大正八年八月三十日より開催された友愛会第七周年大会においてであつた。大会記事には麻生と棚橋の名が散見されるが、特に麻生は最終日（九月一

日）の常任理事選挙で当選し、友愛会内における地歩を固めた。[17] 麻生が活躍したこの大会に、赤松克麿、山崎一雄は出席した。[18] 山崎は、友愛会大会最終日を朝から晩まで傍聴した後、堺利彦、生田長江らの社会主義者が出席を許されるまでに変つた友愛会大会[19]の革新的雰囲気や会が一糸乱れずみごとに進行する様子、さらに代議員の力強く純一な態度に涙ぐむ位の喜びを感ずる、と高い調子で自己の興奮を伝えた。[20] 社会主義の思想研究を超えて、労働者との接触を希望していた新人会員にとつては、当時、わが国の労働運動界においてもつとも大きな影響力を占めていた友愛会大会を自分の目で確認したり、そこにおいて活動する麻生、棚橋らの活動を見ることの感激を抑えることができなかつた。

先輩格の麻生、棚橋が友愛会を改革する一方、後輩も労働組合運動に参加することになる。友愛会大会に出席した赤松と山崎は、九月七日、信友会の大会にも出席したが、[21] 新人会員の一部はこのように急速に労働運動に身を挺するようになる。赤松は、十六日には、新人セルロイド工組合日暮里支部の演説会に、新明正道、門田武雄とともに出演した。[22] 新人会は既存の労働団体と接触を保ちながら、自からの労働組合活動も維持していたが、さらに新人セルロイド工組合を中心とした新人労働同盟を結成した。しかし、同盟の詳細についてはかならずしもつまびらかでなく、『デモクラシイ』も、新人会系の労働組合を結束して新人労働同盟を結成する、[23] と予告はしたが、事後の報告はない。結成の日時についても大正八年の九月ということ以外不明である。かくのごとく、実態把握が困難な新人労働同盟であるが、門田武雄が総務委員長として新組織を統率することとなつた。[24]

新人労働同盟が世間の注目をひくことになるのは国際労働会議の代表選出をめぐる運動に同盟が参加して以後のことであつた。国際労働会議とはヴェルサイユ条約の調印によつて成立した国際労働機関（ＩＬＯ）の総会のことであつたが、その第一回総会は大正八年十月二十九日から十一月九日まで、ワシントンで開催されることになつた。[25] この総会には加盟各国の政府二名、資本家、労働者各一名の代表委員によつて構成され、そのうちの労働者側代表委員は、加盟国の代表的労働団体

との合意のうえで選定されることになつていた。政府は友愛会、信友会などの労働団体を公認していないという態度をとつていたために、大正八年秋には国際労働会議の労働者側委員の選定をめぐつて世上騒然となつた。第一候補本多精一、第二候補高野岩三郎、第三候補桝本卯平の決定に対して、労働団体は自分たちが合意していない選定方法に問題があると反対運動を開始した。世論の動きの中で、本多、高野は辞退したが、桝本が受諾するや反対運動はさらに高まつた。新人会も新興成金の鈴木商店重役である桝本は模範的資本家であるとして反対の態度を固め、新人労働同盟とともに桝本代表に反対する全国労働者大会の発起団体の一つとなつた。十月五日の芝公園大運動場における集会に、新人労働同盟は加わり、帝大学生七名の指揮のもと、約二千人のデモに参加した。[26][27] 新人労働同盟は一躍注目されるところとなつた。

新人会員の一部はやがて鉱山労働者との接触を深めることになる。まず、棚橋小虎は、友愛会大会で鉱山部が独立した際に主任となつた。[28] 棚橋のほか佐野学と石渡春雄は全国坑夫組合に参加し、大正八年九月六日に発会式のために足尾に出発した。[29] 佐野はそのころサンジカリズムの直接行動論に傾倒し足尾では坑夫組合を自ずから指導することになり、その坑夫たちは上京の際に新人会を宿とした。[30] 十二月二日、麻生久と棚橋小虎が日立鉱山で争議を支援中に検挙され、水戸監獄に収監された。[31] 赤松克麿は獄中の麻生、棚橋と面会した。赤松は、麻生の両頬から下顎にかけ髭が蓬々と生えているのを見てヴ・ナロード運動の祖国であるロシアのソシアリストを想起した。[32] 運動の火中に身を投じ、獄中に呻吟したロシアの先駆者こそ資本主義社会の不合理と闘う新人会員の理想像であつた。折しも麻生の父は病床にあつた。麻生の下獄を知らされていなかつた父は麻生の帰宅を望んだが、獄舎の壁はそれをはばんだ。赤松は、獄舎の壁を間に、相見えることのできない麻生父子の中にヴ・ナロードの思想に殉ずる新人会員の典型を見出すのであつた。

（1）前掲宮崎「柳原白蓮との半世紀」二二一―二二二頁。

（2）血潮子「亀戸の夜雨」（『デモクラシイ』第二号　大正八年四月　一六頁）。なお、血潮子は宮崎龍介のペン・ネームである。

（3）「新人会記事」（『デモクラシイ』第四号　大正八年六月　一六頁）。

(4) 前掲宮崎「柳原白蓮との半世紀」　二二二頁。
(5) 大原社会問題研究所編纂『日本労働年鑑』大正八年（大正九年五月）　二一頁。
(6) 右同　五七頁。
(7) 山代巴・牧瀬菊枝編『丹野セツ　革命運動に生きる』（勁草書房　一九六九年十二月）四八―九頁。
(8) 前掲林要『おのれ・あの人・この人』　一〇八頁。
(9) 「新人会記事」（『デモクラシイ』第五号　大正八年七月　一一頁）。
(10) 『労働及産業』第八巻第八号　大正八年八月　二〇頁。松岡駒吉は、野坂を評して「友愛会始まつて以来の頭脳明晰な若い労働問題研究者である」と紹介していたが、野坂は自費で社会問題研究のため渡英し、ロンドン郊外のアイズルウォースで研究した（野坂参三『風雪のあゆみ㈢』新日本出版社　一九七五年九月　一六六頁）。野坂は、在ロンドン友愛会調査部員として、ロンドンより通信を送つた。野坂は、航海中に見聞した支那、インド、エジプトの港についても話すことが数多くあるが、そんなことを書く余裕はなく、一刻も早く知らさねばならぬ重大問題がある、と英国労働組合大会の模様を伝えた（野坂鐵「雨になるか風になるか社会改造の戦は挑まれた」〈『労働及産業』第八巻第十二号　大正八年十二月　一五―二二頁〉）。これは野坂がもたらした第一信であり、以後野坂は多次にわたり通信文を送付し、それが『労働及産業』をはじめとする労働組合関係の機関紙誌に掲載された。
(11) 鈴木文治は麻生と棚橋を新人会が送り出した新進の闘士と評した（鈴木文治『労働運動二十年』総同盟五十年史刊行委員会　昭和四十一年八月　一七九―一八〇頁）。
(12) 麻生久伝記刊行委員会『麻生久伝』（麻生久伝刊行委員会　昭和三十三年八月　一二六頁）。
(13) 平貞蔵は、当時のことをつぎのように記している。すなわち、「麻生さんは、自分は全力で飛込んでしまつているから、『おまえたちも手伝え』といつて、みんなを引つ張つていこうとするけれども、波多野や新明らと一緒に話を聞いていて、おれたちはまだできていないし、これからその勉強をしなければいけない、しかし、多少手伝わなければいけないだろうということで、友愛会の労働学校の手伝いをしようか、という話になり、一週間か二週間に一晩くらい行つていた。」（平記念事業会『平貞蔵の生涯』〈昭和五十五年五月〉　九〇―九一頁）。
(14) 麻生の入会以前には、大正八年一月から六月までの期間において、新人会員の『労働及産業』への寄稿はわずか一編であつた。それは、野坂鐵「食ひものにされぬように」（『労働及産業』第八巻第一号、なお野坂鐵は野坂参三のペン・ネームである）のみであつた。麻生入会後には新人会員の寄稿がふえる。会員名と論題はつぎの通りである。第八巻第七号（大正八年七月）に、麻生久「労働運動の新意義」、波多野謙「国際労働運動の歴史」（なお、波多野謙は波多野鼎のペン・ネームである）、隅田春雄「カルル・マルクス」（なお、隅田春雄は石渡春雄のペン・ネームである）、同第八号（同八月）に、細野三千雄訳、「伯林の惨話」、同第九号（同九月）に、麻生久「国際労働法規並に来るべき華盛頓の大会に就いて」、同第十一号（同十一月）に、麻生久「不当なる労働者代表委員選挙に対し我会の執りたる態度顚末報告」、同第十二号（同十二月）に、野坂鐵「雨になるか風になるか社会改造の戦は挑まれて」であつたが、特に、麻生入会直後に新人会員の寄稿が集中している。

(15) 麻生久「労働運動の新意義」（『労働及産業』第八巻第七号　大正八年七月　六頁）。ただし、麻生は、ロシアの労働運動が人類救済的な色彩を帯びる、と評価しつつも、極端な破壊的過激的手段を用いているのだとすれば慎重に注意を払うべき、ともしている。

(16) 麻生、棚橋による友愛会の改革をめぐる問題は『総同盟五十年史』第一巻（総同盟五十年史刊行委員会　昭和三十九年十一月　二六二―二八三頁）に詳述されている。

(17) 「友愛会第七周年大会記事」（『労働及産業』第八巻第十号　大正八年十月　一三頁）。

(18) 「新人会記事」（『デモクラシイ』第七号　大正八年十月　一六頁）。

(19) 前掲『総同盟五十年史』第一巻　二七三―四頁。

(20) 与三吉「友愛会大会傍聴記」（『デモクラシイ』第七号　大正八年十月　一五頁）。なお、与三吉は山崎一雄のペン・ネームである。

(21)(22)(23)(24) 「新人会記事」（『デモクラシイ』第七号　大正八年十月　一六頁）。

(25) 前掲『総同盟五十年史』第一巻　二八四―五頁。

(26) 「高野博士に就いて」（『デモクラシイ』第七号　大正八年十月　一一頁）。

(27) 『東京朝日新聞』大正八年十月六日。赤松克麿は反対デモへの新人会の参加を、「大正八年の十月、（中略）、新人会同人は新人セルロイド工組合を率いて之れに参加した。そのときの指揮官は門田武雄君であつた。このとき新人会員たる三輪寿壮、嘉治隆一、河西太一郎、林要の諸君が十名ばかり帝大の制服・制帽の一群を成して示威行列に加わつたことは、社会の非常な注視をひいたのであつた。」（前掲赤松「新人会の歴史的足跡」　七一頁）と回想している。

(28) 前掲『総同盟五十年史』第一巻　二六二頁。

(29) 「新人会記事」（『デモクラシイ』第七号　大正八年十月　一六頁）。

(30) 前掲林要『おのれ・あの人・この人』　一〇九頁。

(31) 「新人会記事」（『先駆』第一号　大正九年二月）。

(32) 黒川四郎「友愛会日立支部遭難に就いて」（『先駆』第一号　大正九年二月　三七頁）。なお、黒川四郎は赤松克麿のペン・ネームである。

五　共鳴者の拡大

新人会は自分達の思想に共鳴する人々を都市に、田園に、海外に獲得していつた。新人会の思想は、資本主義社会を改造した後に相互扶助社会を築き上げる、というものであつた。新人会は、ホッテントットの社会に一種の理想社会がある、と

するクロポトキンの指摘に共感を覚えた。[1] ホッテントットは人類の等級中最低にランクされる人種でもつとも不潔な動物とまでいわれるが、互いに助け合い、一人が何物かを受ければ直ちに居合わすすべての者にそれを分配し、自分は飢えていても、通り掛りの人を呼んでその食物を分ち与える習慣があるとしていた。以上の習慣こそ新人会が望む相互扶助社会の典型となるものであつた。佐野学は、これに続き、「相互扶助」とともに、「連帯」、「一なり（ワンネス）」の心情こそ人類社会を支配する善なる原則であるとするクロポトキンの主張を紹介した。[2] 新人会は相互扶助社会を築き上げるために一体となり連帯すべき人々の群れをもとめて活動に従事したが、これらの活動に触発された人々が、新人会思想の共鳴者となつた。共鳴者のひろがりは遠く朝鮮、支那にまで及んだ。

国内における地方支部の結成も新人会思想に共鳴した地方の智識青年や労働者の手によつて実現した。『デモクラシイ』創刊とほぼ時を同じくして、大正八年三月一日に仙台市分会が発会式を挙行した。[3] 新人会は、同分会を二高及び東北学院の共鳴者を結束した同志の会合、とした。ついで、四月十九日には京都新人会が発会し、会衆は新人会員の演説に時代精神をみとめ、これまた共鳴者となつた。[4] 翌二十日は名古屋で演説会を催し、名古屋新人会の芽は植えつけられた。[5] 名古屋を辞し夜汽車の客となつた新人会員は、連日のオルグから生じる疲労と睡眠不足にも拘らず、西京、中京に同志の新人を見出した喜びから寝つかれなかつた。しかし、以上の三地域における共鳴者の活動の実態は明らかではない。

広島、秋田、金沢の三支部も結成された。[6] 広島支部は、大正八年七月、広島市元宇品町の労働者、丹悦太が会員約百名近くを集めて結成した。[7] 丹はみずから支部長となり、会員としては三崎良一、森本丹一のほか、木挽組合より山本某が参加し、毎月会費として三十銭を徴収した。新人会の支部は、全国に数支部にすぎないということもあつて、広島支部は貴重な支部であつた。同支部の事務所は市内元宇品町におかれた。広島支部は地方都市の工場労働者が結成したもので、組織の規模が大きく、労働団体の性格をもち、活発であつた。新人会が普選要求運動に手を染めたように、広島支部もこの運動に参

加した。たとえば、大正八年十一月三十日に丹悦太が他の普選要求の運動者とともに市内の広島劇場で演説を行つたことが挙げられる。広島支部は『先駆』、及び『同胞』時代にあたる大正九年以降においても普選要求運動を継続しており、早い時期にこの運動から手を引いた本部とこの点では異なる。広島支部は、大正九年六月には、広島製針朋友会、広島活版親友会とともに、広島労働連盟を結成、さらに十年二月には、九州の労働団体と提携協定を成立させ、二月一六日に広島市公会堂において協定成立を契機とする労働問題政談大演説会をひらくなど『デモクラシイ』時代に萌え出た活動の芽を大きく成長させることになる。広島支部が労働者を基盤に地方都市において結成されたものだとすると、秋田、金沢の両支部は農村地域を基盤にするものであつた。秋田支部の結成については正確な日時が不明だが、責任者となつたのは佐藤賢太であつた。[8] 佐藤は、小学校卒業後、早稲田大学の政経科講義録で勉強した。その後宮崎龍介の父滔天に師事し支那にわたり（大正元〈一九一二〉年）、孫文の革命運動に関与した。帰国（大正六〈一九一七〉年）後、一時期東京において時事新報社社会部市内通信員をしていた。秋田に帰郷したのは大正七（一九一八）年である。佐藤には革新的智識を啓蒙する新人会の活動に共鳴し得る素地があつた。秋田支部と比較すると、本部会員が設立に関与した金沢支部については記録が豊富である。金沢支部は大正八年七月に結成された。[9] 同支部の設立には新人会員であり四高出身者の新明正道の尽力があつた。[10] 新明は帝大二年生の夏休みに帰省した際、金沢支部の結成を試みた。新明の呼びかけに農村青年の河合正治、[11] 沢飯吉三郎らが応じ、支部設立となつた。支部は金沢市六斗林に置かれ、やがて機関誌『異邦人』を発刊するなど新人会支部の中では積極的な活動を展開する。秋田、金沢の両支部は活動面においてはかなりの開きがあつたが、ともに農村の智識青年が中核となつた。以上のごとく、新人会は、この時期に、広島、秋田、金沢に組織的に共鳴者を得ることができた。

新人会の思想に共鳴したのは支部員のみではなかつた。資本主義社会の不合理に犠牲となつているもので、多少とも智識をもつものは、新人会の思想に触れると、個別的に新人会の共鳴者となる者がいた。平貞蔵のふるさとである山形県からも

製糸工女が苦境を『デモクラシイ』に投稿した。[12] 彼女もまた資本主義制度により生活の基盤を破壊された一人であつた。彼女はかつて代用教員も務めたのだが、生家が中農から小作農に転落したため製糸工場で働くこととなつた。彼女は新人会員に、労働問題は何も都会の専有物ではないのであつて田舎の工場においても労働条件の劣悪さは深刻であり、濁つた空気の中で働き夜は汚い室に眠らねばならない、と訴えた。資本主義社会の残酷な制度をかく指摘した後、彼女は、自分には判断する力もないので山川菊栄女史や貴方方の教示によつて進むの外はない、奮闘を祈る、と新人会への期待を表明した。新人会はここにおいてもまた一人の共鳴者を得たのであつた。

新人会は先進資本主義国に簒奪される弱小国に対しては限りない同情の意を表し、朝鮮や支那は帝国主義に蹂躙されているとした。発禁となつた『デモクラシイ』第二号には、巻頭言として「朝鮮青年諸君に呈す」が掲げられ植民地支配の不正を非難し、廉尚燮は「朝野の諸公に訴う」を書き、朝鮮問題に対する義あり涙ある愛情を示して欲しいと訴えた。朝鮮の三・一運動、中国の五・四運動の実状に接する時、新人会はおりしも第一次世界大戦後の風潮であつた民族自決主義賛成の念をいよいよ強めた。京都新人会の発会に際し西下した新人会員は朝鮮青年から三・一運動の実状を聞いた。新人会員は、失われた祖国のために老幼を問わず民衆が立ち上り、しかも運動の先駆が京城の女学生であつたことなどを知り、その真剣さに覚えず涙を流した。[13] 朝鮮の青年と同様に中国の青年も民族的自覚の高まりの中で救国活動を展開中であつた。日貨排斥などの活動を指導する中国学生の思想がいかなるものであるのか、意見交換会を開催しようとの企画が、吉野作造を中心に立案された。[14] 交換演説会の開催に際し、交渉の任に当つたのは宮崎龍介であつた。[15] 神戸港から中国へ出発した宮崎は、乗船が黄浦江に入港した時、「日本さえ改造さるれば喜んで提携する」という大陸の友に改造運動の物語をしたい、大陸の新運動の話も聞きたい、と期待に胸をふくらませた。上陸予定地の上海は排日運動が激化しつつあつたが、宮崎はここに上陸した。かれは、傲慢な野心家や悪癖な小人には排日は敵であろうが、人間愛の柔和な心で人の前に平和の祈祷を献げ得る者

にはそんな事柄は恐怖でも戦慄でもないのだ、という意気ごみであつた。宮崎は、また、万人の間に一刻も早く麗わしい人格の確立と楽しい平和の保証と輝やかしい平等の福祉とが到来して欲しい、と希望した。宮崎は上海において一高以来の旧友・李仁傑を訪ずれた。李は日本の新運動に興味をもち理解していた。日本の状況を聞いた李は、しばしの沈思の後、「日本の改造は何時できるのか」と問うた。宮崎は、李に限らず亜細亜の醒めた人々が日本の改造の完成を心待ちにしている、と感じ、新人会をはじめとする日本の改造運動への共鳴者が海を越えた地にも存在することを確信した。[16] 宮崎を含めて、大正八年七月には相前後して三人の新人会員が訪支した。[17] 佐野学が満州へ、岡上守道が北京からシベリアへ、と旅行したのがそれである。十二月には平貞蔵、早坂二郎が上海、北京、ハルピン、ウラジオストックを旅行し、千葉雄次郎は大正九（一九二〇）年のことであるがウラジオストックへ旅行した。岡上は、ただ訳もなく支那が好きだからといい、北京に入る前から頭を坊主にして安い支那服を買い求めて着用し、支那宿に南京虫を友として真夏の焼け付く様に熱い三カ月をところ定めず彷徨した。[18] 岡上の支那旅行記はユーモラスに支那人の生活を紹介したが、他国人からみれば無秩序で不衛生極まりない支那民衆の生活にもかえつて人間らしさを見出しており、新人会員が抱いていた人類相愛思想の一端を感じさせるものであつた。宮崎は北京大学を訪問した折、ここの学生が新人会の存在を熟知しており、その活動に注目し、『デモクラシイ』を読んでいることを知り、共鳴者のひろがりの深さに驚愕した。[19] 中国では排日運動の真最中であつたが宮崎のみならず北京大学を往訪した新人会員を熱誠こめて歓迎してくれた。翌年五月には、答礼の意味をかねて北京大学から五名の学生代表がきた。[20]

（1）クロポトキン「ホッテントットの生活」（『デモクラシイ』第二号　大正八年四月　一二頁）。
（2）佐野学「クロポトキンの社会思想（一）」（『デモクラシイ』第五号　大正八年七月　一一頁）。
（3）「新人会記事」（『デモクラシイ』第二号　大正八年四月　一六頁）。
（4）（5）「中京と西京」（『デモクラシイ』第四号　大正八年六月　一六頁）。

(6) 「新人会記事」(『デモクラシイ』第六号　大正八年九月　一六頁)。
(7) 山本茂『広島県社会運動史』(労働旬報社　昭和四十五年三月)　二〇一―三頁。なお、丹について、『デモクラシイ』は、「お目出度いのは広島の丹君が男子を挙げた事だ。等と命名すと云う。註に曰く等とは平等を意味す。」(「新人会記事」〈『デモクラシイ』第六号　大正八年九月　一六頁〉)、と近況を報じた。
(8) 小沢三千雄編『秋田県社会運動の百年』(昭和五十二年十二月)九三頁。上記書では佐藤が大正十年頃入会とされているが、『デモクラシイ』第六号(大正八年九月　一六頁)に、はすでに会員とされ、その活動が紹介されている。
(9) 資料四高学生運動史刊行会編『資料第四高等学校学生運動史』(総合図書　昭和五十一年十一月)　二二六頁。
(10) 新明正道「新人会金沢支部について」(前掲『資料第四高等学校学生運動史』　一一五頁所収)。
(11) 河合は、新人会一周年記念祭の頃、高田村の新人会本部に逗留した(前掲林要『おのれ・あの人・この人』　一二二頁)。
(12) 山形県の一製糸工女「青年諸氏への希望」(『デモクラシイ』第六号　大正八年九月　一四頁)。
(13) 前掲「中京と西京」。
(14) 松尾尊兊『大正デモクラシイ』(岩波書店　一九七四年五月　二九七―八頁)。
(15) 吉野作造は、「滔天君の息で法科に居る宮崎君が夏休み支那に行くので直接大学に交渉して呉れる筈になつて居る」(『東京朝日新聞』大正八年六月十六日)と語つた。また、宮崎は、訪支について、「吉野博士の依頼に依つたのではなく僕自身年中行事として上海に来るに就き博士から『若し上海で学生に遭う様なことがあれば交換講演のことを聞いて呉れまいか』との註文があつた丈けのことだ」(宮崎龍介「新装の民国から」〈『解放』第一巻第七号　大正八年十二月　一二七頁〉と記している。
(16) 前掲宮崎「新装の民国から」　一二〇頁　一二四頁。
(17) 「新人会記事」(『デモクラシイ』第六号　大正八年九月　一六頁)。
(18) 黒田礼二「バガボンドの北京見聞記」(『解放』第一巻第六号　大正八年十一月　一二一―一三三頁)。なお、黒田礼二は岡上守道のペン・ネームである。
(19) 前掲赤松「新人会の歴史的足跡」　七三頁。
(20) 早坂二郎「新人会十年の歩み」(『祖国』第二巻　第九号　昭和四年九月号　六五頁)。

六　結　語

新人会は、理想とする相互扶助社会が資本主義によつて破壊されつつある、ととらえた。資本主義を改造し、相互扶助社

会を再生させることが、新人会の活動目標であつた。この目標は『デモクラシイ』時代の新人会のみが有したわけではなく、以後の時代においても共通の目標であつた。目標は後続の時代と同じではあつても、『デモクラシイ』時代には新人会の会勢は上昇期にあり、活動も成長の時代であつた。活動に臨んで新人会は大きな使命感を抱いた。『デモクラシイ』創刊号はホリヨークの一文を掲げた。(1) その文は伝道をテーマにしたものであつた。伝道という活動は「商売」ではなかつた。もし「商売」であるなら、奴隷のように労働し、しかも乞食のようになつて死ぬかも知れない、割の悪いことには手を出さない筈であつた。伝道という職業に従事するのであるならば、功名心よりは深く、利欲よりは強い、動機があつた。ホリヨークの一文を掲げたのは、新人会も自からの活動を伝道と認識していたからであろう。新人会はこの認識を堅持していたし、演説会、講演会による啓蒙宣伝、労働者との交流、地方支部の創設などについても、当然この認識が維持された。新人会は、資本主義を改造し、相互扶助社会を再生させるための活動に従事した。

（1）ホリヨーク「伝道は」（『デモクラシイ』第一号　大正八年三月　一四頁）。

後記　本稿は中村・内川の共同論文であるが、一九七八年七月から毎月一回以上開会している「新人会研究会」の共同研究の成果でもある。研究会のメンバーは中村、内川の他に酒井正文（中部女子短期大学講師）、吉田博司（八戸大学講師）、宗片邦子（慶應義塾大学大学院法学研究科政治学専攻修士課程在学中）、玉井清（慶應義塾大学法学部政治学科四年生）である。